

学 位 論 文 題 名

モンゴル人の美意識に関する文化人類学的研究

学位論文内容の要旨

本論文ではモンゴル人の詩歌、民謡、文様を研究対象として、モンゴル人の美意識を文化人類学的視点から検討している。本稿はモンゴル人の詩歌理論と創作、民謡歌詞内容と形式、博物館展示品に描かれた文様を主な研究対象として、北・中央アジアの草原地帯で生活するモンゴル人が、異民族からの文化的影響を受けながらも、民族文化全体においては、遊牧という生活様式及び美意識を継続してきたことを明らかにする。論文の構造としては第一章に研究目的、方法、対象を述べ、第二章では詩歌理論における分析、第三章では民謡における分析、第四章では文様における分析を行い、第五章では上述した分析に基づいて、モンゴル人の美意識とはなにか、その継続と変化はどのようなものであるかを結論としてまとめる。

第一章では先ず本稿の研究目的がモンゴル人の美意識を明らかにするものであることを述べ、本研究に関する従来の研究を批判的に紹介した。次に研究理論と方法が文化人類学的視点をとることを述べ、さらに研究対象としてモンゴル人の詩歌理論と創作、モンゴル民謡歌詞、モンゴル文様などであることを述べた。

第二章では『詩鏡論』の影響をまとめることを通して、詩歌とその表現形式におけるモンゴル人の美意識を分析する。7 世紀ごろインドのダンディンが著した詩歌理論の著作『詩鏡論』は、13 世紀ごろのチベット語訳を経て、17 世紀ごろにはモンゴル語に翻訳された。原著の解釈と理論的影響がモンゴル詩歌理論の発祥となり、文学のジャンル、「生命」、「体」、「飾り」の関係、文学理論と創作の関係、詩歌の言語などに関してモンゴル人による早期の文学理論が書かれた。モンゴル人は『詩鏡論』の理論に基づいて詩歌に表現される美的基本範疇に関して論じ、詩歌創作においては比喻方法が多様化しただけでなく、ラマ文人の詩歌スタイルなどが形成されたことを明らかにした。

第三章では内モンゴル文化出版社から出版された『蒙古族民謡集成』に収録された 2,591 曲のモンゴル民謡歌詞内容に 7,102 件の人類学的内容キーワードをつけ、それに基づいてモンゴル民謡の歌詞内容に関するデータベースを作成した。このキーワードにしたがってモンゴル民謡を人間と人間、人間と自然環境、人間と動植物、人間と超自然、人間と生業、人間と物、人間と娯楽、人間と自然現象、その他などの 9 大項目のもとに分類した。さらにデータベースの量的分析の結果、モンゴル民謡の中で「恋人」、「馬」、「故郷」を歌う民謡が最も多く見られることが分かった。さらに、歌詞形式を分析した結果、行頭の発音で韻を踏むモンゴル詩歌の形式的特徴が民謡の歌詞にも用いられていることが明らかにした。

第四章ではモンゴル国立民族歴史博物館の 1,253 点の展示資料を対象にして、筆者の調査及び当博物館から得られた情報資料により、展示資料データベースを作成した。そのデータベースに基づいて、展示資料に描かれた文様を分析し、文様に表現されたモンゴル人の美意識の継続と変化の様相を検討した。動物文様、唐草文様などがモンゴルにおいて石器時代、スキタイ時代から継続してきたことが明らかにされた。モンゴルと隣接するチベット、漢民族との文化交流に伴い、仏教的な飾り文様である吉祥結、蓮弁、

あるいは中原文化に見られる龍の文様などが受け入れられていたことが明らかにされた。

第五章ではモンゴル詩歌、モンゴル民謡、モンゴル文様という三つの対象の分析結果に基づいて、詩歌、民謡、文様に表現されたモンゴル人の美意識をまとめた。その結果モンゴル人には生活する草原という生態、およびそれに適応する遊牧という生活様式と密接に関連した美意識の表現があることが明らかにされた。モンゴル民謡における「恋人」、「馬」、「故郷」などの歌詞内容、モンゴル文様における馬、羊など動物文様からこれが読み取られた。モンゴル人にとっては、動物文様、唐草文様などが芸術の内容と形式の面で表現される美的なものとして、長い歴史の中で継続してきたと見られる。この歴史の中で宗教の変化などに伴って、インド、チベットからの文化的影響を受け、『詩鏡論』に基づく詩歌表現形式、仏に関する民謡、八宝文様などモンゴル人の美意識の表現である芸術の内容或いは形式が変化した部分があることが明らかにされた。

学位論文審査の要旨

主査	教授	煎本	孝
副査	助教授	佐々木	亨
副査	教授	宮武	公夫

学位論文題名

モンゴル人の美意識に関する文化人類学的研究

本論文では文化人類学的視点からモンゴル人の美意識を中心に検討を行っている。本稿はモンゴル人の詩歌、民謡、文様を主な分析対象として、これらに表現されるモンゴル人の美意識を明らかにした。北・中央アジアの草原地帯で生活しているモンゴル人は、異民族からの文化的影響を受けながら、草原という生態、および遊牧生活に関連した美意識があるということが明らかにされた。そして、詩歌、民謡、文様に見られるモンゴル人の美意識を歴史的変化の中で位置づけた。方法はモンゴル人の『詩鏡論』という詩歌理論の文献学的分析、『蒙古族民謡集成』に集録された 2,591 曲のモンゴル民謡の分析と人類学的キーワードによるデータベースの作成、モンゴル国立民族歴史博物館における展示資料 1,253 点のデータベースの作成と文様の分析からなるものである。同氏がモンゴル人であるとはいえ、モンゴル人の美意識を明らかにするにあたって、詩歌、民謡、文様という重要ではあるが、限定された分析対象のみをあつかっており、その結果は、あくまでこれら分析対象に制限されたものである。しかし、大量のモンゴル民謡のデータベース化と分析、博物館におけるモンゴル文化展示資料に関するデータベース化と分析などモンゴル文化の全体像を把握するには大きな支障はないものと考えられ、本論文の結果は博士論文として高く評価されるものと判断する。

本論文のもととなった研究の一部は既に学会誌、科学研究費報告書などに発表されている。とりわけ本論文は、モンゴル人の美意識に関する文化人類学の領域にわたり、モンゴル人の美意識の歴史的、全体的様相を理解するために、貴重な資料と分析結果を提供している点で、今後のモンゴル研究の推進に大きく貢献するものである。

本論文の博士論文としての内容、及びその学問的貢献は高く評価される。当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。